

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號六第 卷三十二第

行發日一月二十年五十正大

論叢

足利時代の通商貿易

教授 文學博士

三浦 周行

家屋税の本質

教授 法學博士

神戶 正雄

表定運賃論

教授 經濟學博士

小島昌太郎

時論

英國勞働黨の農政方針

教授 法學博士

河田 嗣郎

說苑

マックス・ウェーバーの政策論の根本概念

講師 經濟學士

藤田 敬三

露西亞に於ける農政改革とその效果

講師 經濟學士

吉川 秀造

雜錄

領主擁護の農民騷動

教授 經濟學士

黑正 巖

民文に就きて

教授 法學博士

財部 靜治

美濃名森村の地割制度

教授 經濟學博士

本庄榮治郎

サミュエル・ベイリー

講師 經濟學士

森耕二郎

最近の露國組合運動

和歌山高等商業教授 經濟學士

岩城 忠一

法令

健康保險法施行令・外國人土地法施行令

附錄

本誌第二十三卷總目錄

統計拾穗抄(五)

財部 静治

八 民文に就きて

民文 Demography を唱へつつ、その中に人口の數、出生婚姻及死亡率、人口の年齢別、男女別及地方別、否實に人口實査及 Registrar-General の報告より、當然汲取るべき諸測定を包含せしむるのみならず、産業及社會の諸測定をも羅致すべきものとし、人口の職業別、所得、賃銀、物價、生産、外國貿易、運輸その他の事項にも、その測定を及ぼすこととせんか、

民文の分界は諸方に擴大せられ、社會學又は經濟學の研究者にとり、直接に興味を惹くべき、統計的研究の大部分はその中に包容せられんと評説し乍ら、別に尙民文の確實なる限界を、定言することを避けしは、英の大家 Bowley が統計學に關するその一好著に於て採れる態度なり、(cf. Elements of Statistics 4. ed. '20 p. 7) 此一事によりても、略推測し得べきが如く、民文又は民誌の一學名を、使用することを全然避けんとする者は兎も角とし、之を採擇する者の間にありても、その用法區々に流るるを見る、(社會統計論細初版四七頁以下及四九六頁以下參照) 今諸國學者による之が用例變遷の跡を大觀するに、同學名そのものとして、消長循環の常道を歩みつゝあるかを訝らしめ、特に又人口の學問的研究に於ける、軌近の一風潮を徵せしむるに足るものあるを以て、聊かその大要を窺はんと欲す。

民文てふ語の發明者 Achille Guillard は、一八五五年之を以て廣義にては人類の自然史及社會史と解し、(その著書は人類の計數的發展と、活力及福

祉の發展換言すれば生死統計論とに關する二編以外に、智能的・道徳的啓發に關する一編を、含むことを注意すべし) 一層限られたる意義によれば、人口、その一般變動、その身的民事的・智能的及道徳的状態の、數學的知識なりと解したり、(cf. Statistique Humaine, p. X XVII) 同書は才氣を窺はしむるものなしとせざるも、材料を極めて氣輕に取扱ひ、叙説一般的に流れ語法曖昧の嫌あり、寧ろ國民の單純なる敘事視すべきものありしが、次いで獨逸の Rimmelin は、統計學理に關する一八六三年の論文に於て、民文中に人口統計論、經濟統計論、開化統計論を包含せしめたるも、政治生活の記述は、國家の學問としての氏の所謂國家誌 Staat-enkunde に屬せしむべしとし、同國の先人 Knies の學說による、一影響を窺はしむると共に、Guillard の新學名を襲用せるが、伊國 Brunerri の如く、右の見解に同意せる者をも生じたり。(Rimmelin の學說は詳しく之を紹介し、又評論するの値あるも、右の論文以後に於ける氏の講述作をも、併せ考ふるの要あるのみならず、その所説は近年の學者にも、深甚なる影

響を及ぼせるものあるを以て、之を別稿に譲ることとせり）次
に Engel は民文の意義を擴げ、民衆の社會及政
治状態を叙説し、社會の現状及移動につき、その
起因を究むべしとし、之に獨立の一學問たる地
位を承認したり、かくて Engel の學説は、最早
同學名の創起者と同説たらず、且又その名稱を
變更し、民理 Demologie と呼べり (cf. F. Virgili,
Statistica, 5. ed. II pp. 172, 173 社會統計論綱目版六九一
頁以下參照) 斯くの如く民文及民理てふ語は、そ
の當初獨逸の學者間にも、割合に普通に採用さ
れんとしたり。これ一はその當時に際會して、
Statistik てふ名稱を、單純なる方法論としての
輒近統計學に適用し、又その意義を之に限ら
んとするの學說擡頭せるより、獨立實學としての
統計學に對し、之に代るべき一新名稱を附與せ
んとするの、氣運に促されたる所尠きに非ず、
Demographie (之が一語源たる希臘語 Demos は、謂ふ迄
もなく民衆を意味す) の新語によらんとせるは、地
球の記述たる Geographie の類推によるものな
り、されど獨逸の統計學界は、由來統計學を以

て國家の學問視するを、Achenwall 及 A. L. v.
Schlözer 以來の傳統的精神とするものなり、從
ひて俄かに右新氣運に一掃されて沈黙するを許
さんや、果然右の精神に燃わつゝ、統計的比較
研究の必要を力説して立ち、統計學は事實に還
りて之を究むべきことを教へ、由りてかの Bar-
con により示されたる、自然觀察への復歸が、
諸自然科學に貢獻し、又之等をして全然その面
目を一新せしめたるを、同様なる貢獻を諸國家
學に及ぼすを得んとせる J. E. Wappäus は、
反對の烽火を揚ぐるに至れり、(ケッペラーの研究八七
頁、H. Wolf, Theoretische Statistik, 26 S. 174 參照。著
者の大著 Allgemeine Bevölkerungsstatistik, 2 Bde. 1859 u.
60) は、今日容易に得られざる一點よりするも珍籍とするに足
る、されど吾人は獨逸留學中、之を貧弱なる藏書中に納むるの
好機會を掴むを得、爾來珍中の珍とすべきは、同著中著者によ
り示されたる、該博の識、高邁の見に存するを知れり、吾人は
他日向統計學上より、著者詳評の機會を得んと欲す) 即ち
氏は論じたり、「右の名稱(民文)は一見幾分か眩
惑的なるものを有す、されど詳細に察せんか、
その中には統計的一學問の概念を、不當に制限

することを宿せり、即ちその見解によれば、大量觀察により人口を究め得べき限度に於て、人口状態を記述することに限らんとす、從ひては元來人口統計論又は人口誌に外ならず、然るに實學としての統計學は、人口誌たるのみならず、國家誌たるべきなり、從ひて右の民文は、概して統計的性質を帶ぶる程度に於ては、實學としての統計學の一部に外ならず、從ひて統計學てふ名稱を、一方法論のみに留保するために、實學としての統計學につき、民文てふ名稱を採用せんとするは、正當ならずとすべし」
v. (cf. Wappaus, Einleitung in das Studium der Statistik, '81 S. 51. 同書の一邦譯として、吳文聰譯述統計學論、明治二十二年出版あることを、注意しおかんと欲す)

英米兩國にありては、從來民文てふ用語の使用は普通ならざりき (前出拙著初版、Whipple, Vital Statistics, p. 1 參照) 之に反し Guillard の生國たる佛蘭西にありては、流石に統計學者同語を愛用したり、Block, Adolphe Bertillon (オノノ Jacques の好著 Cours élémentaire de Statistique, '95 中 S. Élément.

de Démographie) にも、道徳統計 Statistique Morale と題せる一章を、含むことを注意すべし) E. Leraisseur (民文を明かに統計學と區分し、之を以て「人口の學問」詳言すれば「人口の靜態を確かめ、之と共にその移動を、主として出生、婚姻、死亡及移住につきて究め、由りて人口を律すべき諸法則の知識に、達せんと努む」べき學問なり、「時ありて之を統計學と混同するは、究極に於てはその研究の大部分を通じ、方法と實質とを混同すること、その理由とす」とせり。此一節の原文につきては、拙著初版四九頁參照) の如きは、之が著しき代表者なり。伊太利にても多くの學者は、その間多少厚薄の別は存すとしても、明白に又區別なきものとして、統計學てふ古語と共に、同語を承認す、近年に至り C. F. Ferraris (La scienza della popolazione. Nuova Antologia, 1898) は、統計觀察に立脚せる、人口の確實學問を呼ぶために、同語を承認し、別に民理てふ名目を以て、統計法のみ立脚することなく、その他如何なる研究法をも受入れ、又他の自然科學及社會諸學の助援によるべき、人口研究のために留保せり、從ひてその見解によれば、民文は民理の經驗的基礎を築く、それと同氏は今日尙幼稚なる

右人口學の研究上、之を二部門に分ち二重の名目を立つるの便なるを、必ずしも固執する者に非ず、而して又「民文」てふ語によらんか、抽象的又普遍的なる、法則窮理の學なりとの觀念を起さしむるよりも、寧ろ單純に叙事的なる一學問なりとの觀念を、喚起せしむるの慮れありとせる、後説 v. Mayr その他の學者の意見をも賛成することなし。(cf. Rodolfo Benini, Principii di Demografia, 1^o pp. 3, 4)

況言せんか佛伊の學者は、民文てふ語を大體に承認し、又之を汎博に解するを例とす、而して Maurice Block. *Traité théorique et pratique de Statistique*, 78. 2. ed. '86 は此風潮を代表せる作物にして、又割合に早く現はれたるものなり、同時に Waplaus が前記統計學綱要中同書に下せる評論は、獨佛統計學風の一相違を窺はしむるに足ると共に、獨逸に於ける學說の變遷を、反映せしむるの一助に供し得べきを以て、以下之を譯載すべし。

佛國に現はれたる統計學の一著書にして、種

々の點につき Max Haushofer の著書(その初版刊行は一八七二年なるを注意すべし)を想起せしむるも、

之に比して意義に富み、又一層貴重なるは Block の前記著書なり、此著書なくとも亦既に、經濟學者及統計學者として、盛名を馳せたる著者は、佛國統計局に就職し、極めて良好なる佛國統計の編纂者たりしより、かゝる著述に當るの素養申し分なしとすべく、獨逸語にも通じたり、同著は四編に分たる、即ち(一)歴史編 *Partie historique* (二)理論編 *partie théorique* (三)實務編 *partie pratique* (四)應用編即ち民文 *Partie appliquée ou Démographie* は之なり、同著は幾多の貴重なる材料を含み、著者が統計學及其の歴史に精通せるを示す、又統計學の概念及職分に關する彼の判斷及見解には、徹底して正しきものあるも、その中には說の動搖不定と矛盾とを發見すべし、こは Block が特殊統計論即ち國別現況叙事と、普通統計論即ち比較研究的窮理とを區別せず、之を引離して取扱はざることにその理由を發す、最も貴重なる部分は諸

國統計局の歴史を、極めて完全に報告せる第三編なり、最も弱味に富むは第四編應用統計論即ち民文なり、此名目の下氏は五章を取扱へり、詳言すれば(一)人口統計論(二)道德統計論(三)教會統計論及教育統計論(四)經濟統計論社會統計論(五)政治統計論は之なり、材料分類の編次よろしきを得たりとなし兼ねる以外に、その各章の處理不充分とすべきものあり、一層不良なりとすべきは、應用統計論又は民文編全部が、歴史及理論を取扱へる二編中、統計學の概念及職分につき、吐露されたる見解及原則に矛盾することなり、即ち右兩編にありては、全然 Achenwall 派を祖述し、かの Achenwall 派の統計學を異れる二學に、分たんとせる Kries に反對せるも、その應用編にありては統計學を、計數により表章叙説され得べき部分のみに限り、氏は明かに民文てふ名稱の發明者たる、Guillard の著書により感化されること甚大なりと、Guillard の本書は多くを期待すべく、大なる考案及抱負を以て、世に出でたる著書なる

も、根柢に於ては一好事家の非科學的一業績なり(尙 Guillard に對する Wappus の評論は、その著普通人口統計論一卷一四四頁以下及二卷一〇五頁以下中にもあり)要するに統計學の一部たる人口統計論のみを、而も亦纔かに不完全又不精確に、示すに過ぎざる民文てふ名目は、學界より示ぞけられんことを望ましかれ。(Einleitung etc. SS. 107-109)

以上諸國に於ける「民文」の用例を説き來れり、今尙少しく獨逸の學界に於ける現況に照し、有力なる學者の意見とすべきものに一瞥を加へ、又見道がすべからざる軌近の一風潮を窺ふの目的上、以下 v. Mavr, Bevölkerungstatistik, 2. Aufl. 1. Lieferung, '22 中同語に於て説ける所を骨子として、補説する所あらんか。

人口の元素及人口の諸層に關する統計的察取により、授けらるるもの、全部を以て、確然劃定されたる人口統計論の内容に屬すとすること、かの「民文」又は命名上學問的に一層その鋭鋒を研ける「民理」の、時として混濁されたる一概念の下に、同様なる解釋を與へんとするが如

くすべきに非ず、統計學而も實際統計學の獨立せる一編としての人口統計論の明かに劃定されたる概念にありては、假令ば V. Mayr がその著書に於て採用せるもの、如く、人口の存在、生成及衰滅の上に、普通の人として意義ありとされつゝ、現はるべきもの、全部之に歸す、さればとて人口大量觀察の特別細目として、人口統計論的觀點以外の一觀點より、意義ありとすべきもの、詳細なる解析が、統計學の他の諸編に、屬すとなし得べきことを斥ぞくることなし、假令ば婚姻、出生及死亡事情の特殊逸軌は、複製道德統計論として引離し一括して取扱ひ得べき所なり、又人口職業大別の一般綜覽は、人口統計論にも亦屬すとすべきも、職業別及その社会的分層の完全細目は、専ら經濟統計論の基本問題として取扱ふを可とす、されば人口統計論と統計學の他の諸部門との間に、種々の關聯あり、されど之がために當該研究部門の、原則的に判然分たれたる分界を妨ぐるることなし。(前掲書五及六頁)

「民理」てふ名目を、「學問的人口統計論」てふ名目と、同義に使用するは適切ならず、(V. Mayr が一八九七年の著書人口統計論初版九頁中、計數及計量による觀察に本づく、人口の構造及發展經歷の確實認識、即ち「確實人口論」——「純理人口論」に對立するものとしての——は、「民理」とも呼ぶを適切とすと説けるに反し、新版中「別に深く考慮する所あり」として、かく改めしは注意すべし)されど統計學は一方法論に外ならずとの、見解を採れる者が、分明に劃定されたる一知識範圍にへきての把握を、失はざらんがためになすの要あるが如く、(V. Mayr, Theoretische Statistik, 2. Aufl. S. 33)は學者或は、實學としての統計學存在すべきことを拒みたりとするも、その學問には別箇の一名稱を掲げつつ、社會大量の實質的學問を、再設するの舉に出づることを免れ兼ねんとせり。尙 Wolff op. cit. S. 425) 學問的人口論の代りに、民理(又は民文)てふ名目を選びたりとせんか、かく呼ばれたる知識範圍を以て、人口統計論の知識範圍と、同義なりと觀するを可とす、從ひて又「民理」を特に狹義に用ひ、抽象的常理の立定丈けに限り、意味せしめんとするも亦便ならず(前記 Ferris の所説に照すべし)。(元來「民理」てふ語は全

く不要となし得べき所なるが、右の意味により之を使用したりとせんか、そは實に一層弘く普及せる名目「民文」に比し、勝れりとすべし、蓋し民文と謂はんか、ために人口統計論の研究としては、人口の構造及發展に關する叙事にてその手を收め、恰も學問的統計論の至要内容をなすべき、抽象的常理の立定を、斷念するの外觀を喚起せしむべきを以てなら。 (J. Kőr'si, Wissenschaftliche Stellung und Grenzen der Demologie im Allg. Statist. Archiv. II. 2. 1892. S. 399. も同意見を吐露せり、唯名を正しうすることに拘泥せず、實を探りて進むの趨向によることとせんか現に Geography を地理、Geology を地文としつつ、當該學問の研究を進め來れる例もあり、「民文」「民理」の何れを題して進むも、要は精研の「垂穎」をして、「八握英々然」ならしむるにありとすべからん、現に窮理否叙事よりするも、學問上の一珍果とはなし兼ねるが如き、Whipple, Vital Statistics なども尙謂へり、民文は諸法則の究明 立定を遂げたる、知識の一體として分身さるとの意義により、一學問と呼ぶを得ず、されど發展途上にある一切の學問は、資料を蒐め諸假説を驗めすことに當るべき、叙事的一階梯を踏む、恰もかかる階梯に立てる民文を、一學問と呼ぶも亦可ならんと、若し夫れの Pfand の古き流れに棹し、その末を澄ましめんとして、又名の

新奇を諱ふの立場を探らんか、Karl Haushofer の近業 Geopolitik des Pazifischen Ozeans, '24 の例に倣ひ、人口の政策的方面に關する研究に就き Demopolitik の新語を提唱するは、所謂「人口問題」の解決策朝野に喧しき、當節にありては或は相應はしからん乎)

一九〇一年の刊行にかかる前記 Benini の「民文原理」は、定量及定質の對立を、人口學之に該當すべき擴張に、利用せる者の嚆矢とせらる。(cf. Bortkiewicz, Bevölkerungswesen, S. 4.) そは兎も角諸名目の下に、人口の定質的方面に關する研究を開拓し、かくて人口の學問的研究を大に恢弘せるは、近年の一偉觀視し得べき所なり、之を用語「民理」及「民文」につきて見るも、之が使用を續け、多少不同なる内容を之に押込めんとすることは、同じく右の風潮に驅られて惹起されたり、即ち近年衛生學の發達となり、謂はば罹病の危險に曝らざる健康者に照しつ、病人を考察するの風起りてより、醫學の代表者を促し、至人口靜態及その變動成行の、研究をも亦採入れしむるに至れること、假令は聯合會 Hygienisch-demographischer Kongress 及人口統計的

研究のためにも亦有益なる Archiv für soziale Hygiene und Demographie, Neue Folge der Zeitschrift für soziale Medizin 中の文献に、表明せらるるか如くなるがために然り、(かく社會衛生と關聯を結ばしむるに於ける民文にうまては、右に掲ぐる雜誌の編輯者 E. Roesle が、同誌 Bd. IX. Hft. I に掲ぐる論文 Die Aufgaben des Archivs für soziale Hygiene und Demographie 中、同者より要求せらるる研究範圍の良概覽を窺へ、Handwörterbuch der sozialen Hygiene, hrsg. von Grojahn u. Kaup ; Bibliographischer Jahresbericht über soziale Hygiene, Demographie und Medizinostatistik, hrsg. v. Grojahn und Kriegl なることを注意すべし。序に尙注意し得べきは、萬國統計院が從來その會議の、筋書として採用せる所によるに、I. Sektion „Demographie“ にて人口統計を取扱ひたること、萬國人口統計の範圍特に之が大都市に關する分につき、古くより有能に活動せる Amsterdam の市統計所が、その報告に demographische と題することなり)

要するに何等の誤解に曝さるることなき、「人口統計論」てふ名目の代りに、民理又は民文てふ語を選びたりとせんか、そは全統計學中の一部分として、人口としての人口、並に人口内に起るべき事件を、取扱ふべき分を意味し、その

以上に人々の大量行爲より惹起さるる、全現象を同時に考察することは、之を斷念すべしとを明かに銘記するの要あり。(以上前掲書七及八頁)